

宮川・勢田川に残されている自然環境や歴史文化資源を活用し、利用しやすい河川空間を整備することにより、伊勢神宮をはじめとした周辺施設との連携を図り、地域の魅力向上と活力ある都市空間の形成に寄与することを目的としている。

3. 昼田・玉城地区水辺の楽校

本事業は宮川左岸10.0kで平成26年度から実施しており、令和15年度に完成予定である。現状としては、宮川の自然環境に触れることのできる場となっており、自然を活かした環境教育や自然観察の場としての利用が拡大している。近年は、キャンプの利用が急増している。また、利用実態調査により、水遊びや宮川本川の利用が少ないことが分かったため、宮川本川でも親水護岸を設計し、上下流の公園施設との連携も踏まえ、カヌーの乗り場などを整備することで、川や水辺の利用者の増加を目指している。

(1) せせらぎ水路

せせらぎ水路では、メダカやドジョウ等が確認されており、子供たちが水辺や水生生物等に親しむ場として活用されることが期待されている。グラフを見ると魚類確認個体が減少してから急増していることが分かる。これは、R3～R4夏は水路が冠水する出水が発生せず、宮川本川との魚類の行き来がないため、個体数が減少傾向にあった。R4.10月の出水による本川との魚類の行き来、R5.1月のせせらぎ水路の改良により、魚類が定着したことが、個体数の急増の要因となっていると思われる。



図-3 せせらぎ水路

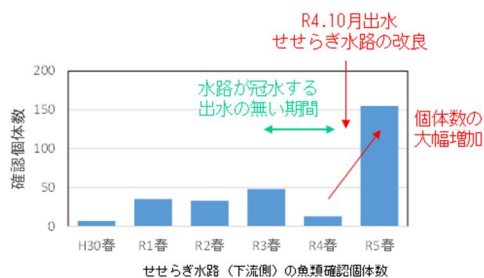


図-4 せせらぎ水路の魚類確認個体数

(2) 背景「玉城町かわまちづくり計画」

玉城町の宮川左岸河川敷は、平成26年度より水辺の楽校として整備がされ、日常的にデイキャンプ等の自然体験の場として利活用が行われている。更なる利用と自然環境が融合した河川空間づくりを推進するため、「かわまちづくり支援制度」を活用し、令和5年8月に登録され

た『玉城町かわまちづくり計画』に基づき、自然体験、歴史体験への活用も考慮した管理用通路(散策路)の整備や宮川に親しむため親水護岸の整備等を計画しており、玉城町では玉城水辺の楽校の更なる利用活性化のため、船着き場、駐車場、トイレなどを計画している。

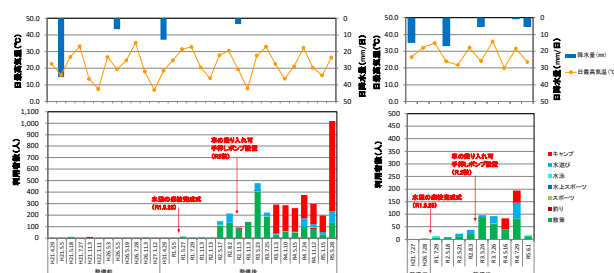


図-5 休日・平日別の利用者数の推移

(3) 背景「百間ばね」

水辺の楽校周辺には、明治時代の水制の遺構である「百間ばね」や、水辺環境としてワンドたまりが存在し、これらの宮川の持つ魅力を活かしたかわまちづくりを目指している。

(4) 課題

水辺の楽校の利用の観点ではいかに利用者や地域住民の意見を反映させ、地域の賑わい創出を図るかが課題である。また、魅力ある宮川の自然環境や歴史遺構をいかに河川空間の整備に反映させるかが課題である。

4. 歴史遺構「百間ばね」

明治時代の水害後、二度と堤防が決壊しないように当時の人々が力を合わせて造った水はね堤を「百間ばね」と言い、造られてから100年から120年は経過していると考えられているが、今でも増水時には、宮川の強い流れをはね除け続けている。本来は図にある青矢印のような流向だったが、百間ばねが造られたことにより現在の流向に変化していったと考えられている。



図-6 百間ばね位置図

5. 関係機関や地域住民の事業への参画

「玉城町かわまちづくり協議会」や「玉城かわまちワークショップ」を設立し、意見交換を行いながら計画の策定・設計への反映を実施した。協議会は今後も継続し、ワークショップは計画段階のみと考えている。今後も引き続き、利用者や地域住民からの意見を参考に設計へ反映する。

(1) 利用者・地域住民の意見

玉城かわまちワークショップ時に行った意見では、川に下りる通路で「通路は飛び石と連動した位置が良い」、百間ばねで「発掘・調査してほしい」等様々な意見があげられ、利用者の目線による意見はとても新鮮で設計を行ううえでとても参考になった。

(2) 目標

利用者等の意見を反映させるため、ワークショップを開催しニーズの掘り起こしを行い、設計に反映させる。河川空間の整備では歴史遺構や、ワンド等の魅力を最大限活用し、ワークショップでの意見も参考として設計に反映させる。

(3) 対策

高水敷の安全な利活用を確保するため、水敷整備、親水護岸、せせらぎ水路など基盤となる整備を実施してきている。更なる利用活性化を図るため、堤防天端と連続する駐車場の整備や、歴史遺構・ワンド等へとつながる散策路（管理用通路）・本川の利用につながる船着き場や親水護岸等を整備する。

6. 取り組み内容の工夫

(1) CIMモデルの活用

ワークショップでは、主に平面図を基に意見交換を行うため、より施設配置を具体的に把握できるCIMモデルを作成した。また、CIMモデルを活用しWebVR機能を付与することで、スマートフォンなどでQRコードを読み取り仮想空間での現場体験ができる仕様とした。

(2) リブ・グローイン構造の採用

整備を行う本地域には、「百間ばね」と呼ばれる歴史遺構があることから、この百間ばねをイメージした石組み水制を配置し、変化のある水際線の形成を図ることができる「リブ・グローイン構造」を採用する予定である。



図-7 第5回たまきかわまちワークショップ

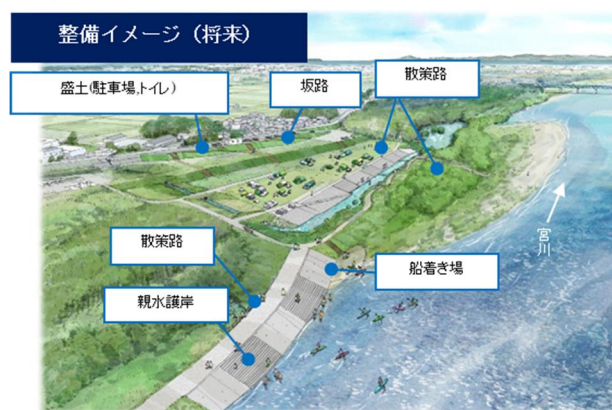


図-8 整備イメージ

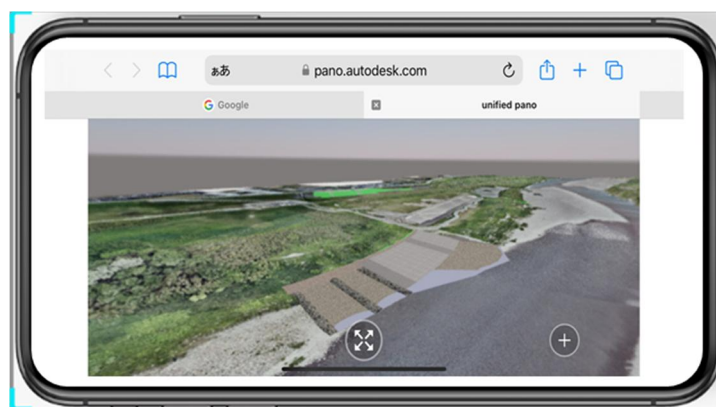


図-9 CIMモデル

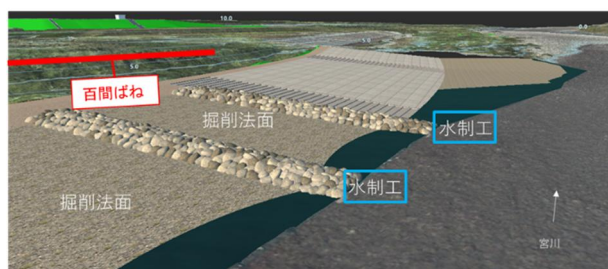


図-10 リブ・グローイン構造

7. 今後の方針

地域住民の河川利用に関する需要が見込まれる事業の必要性は上昇傾向にあるため、これからも玉城町かわまちづくりにあたり、玉城町と連携しながら地域住民などの意見を設計に反映させ、地域住民の理想に近づけるよう努めていくことにより、地域の魅力向上と活力ある都市空間の形成に寄与することを継続していく所存である。

8. たまき水辺の楽校により期待される地域活性化

たまき水辺の楽校では、平成27年に宮川総合水系環境整備事業により、宮川勢田川水辺整備として整備が完了している。図-4、図-9のとおり現状においても、キャンプ、水遊びなどの高水敷やせせらぎ水路での利用、天体観測、水生生物調査などの環境教育としての利用が行われている。R15に昼田・玉城地区水辺整備の完了を予定しており、図-7のような整備を行うことで、宮川本川でも親水護岸を設計し、上下流の公園施設との連携も踏まえてカヌーの乗り場などを整備することで、川や水辺の利用者の増加を目指し、地域の活性化を図っている。



図-1 1 利用状況

謝辞：本論文を作成するにあたり、三重河川国道事務所の職員の方々をはじめ、八千代エンジニアリング株式会社様等、各種ご助言を頂きました関係者の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。